備後撚糸

和紙糸の「備和」好調

織り、編みやすさが評価

備後撚糸（広島県福山市、光成明浩社長）が展開する和紙使いの自社ブランド糸「備和」（ビンワ）が好調に推移している。有力カジュアルブランドなどとの取り組みが進み、発売1年で同社の売り上げの半分近くを占めるまで成長している。

全国的に撚糸業は下請けが多く厳しい環境にあるが、同社は「技術を継承し、安定した基盤を構築する」ため、自立を目指して備和を開発、昨年から販売を開始した。

和紙100％と和紙・ポリエステル交撚糸の二つの糸からスタート。伸度がない和紙で、テンションやスピードを変えながら、強度を高め、伸度が得られるのに最も適した撚糸回数などの工夫を重ねて完成させた。和紙糸は産地の名前を付けて販売されるケースはあるが、同社は「備和は、備後撚糸が開発した、独自の特性や質感をもった和紙糸」と位置付けてブランド化した。20番、27番手糸で拡販を進めている。

和紙糸でも、これまでにない織りやすさ、編みやすさが評価されている。和紙が持っている軽さと吸水性などの機能性もあり、販売は順調に推移している。ジャージーを中心に、有力スポーツ、カジュアルブランドから引き合いが相次ぎ、在庫して販売を進めたが、27番などはすぐに完売するなどの状況だ。

スリット糸と撚糸後の糸

原料となる和紙や紙をスリットするのに時間もかかることから、同社は安定供給に向けた仕組み作りを急ぐ一方、今後はバリエーションも増やしながら、拡販する。